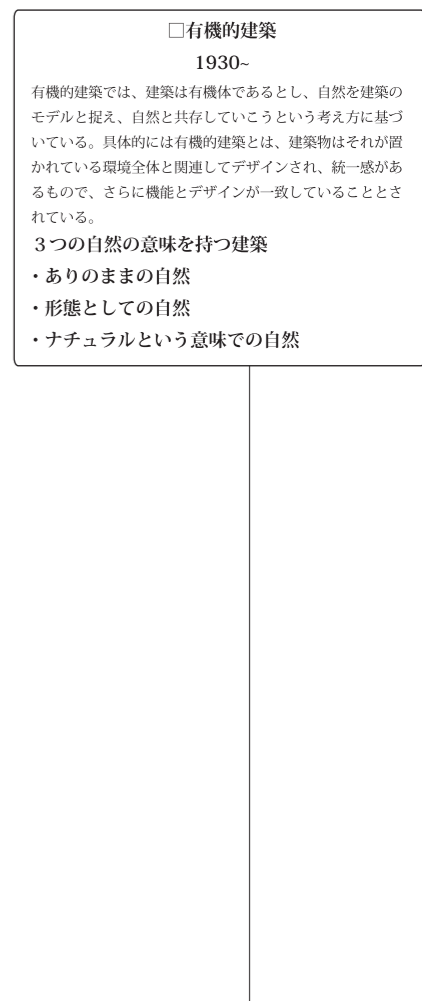
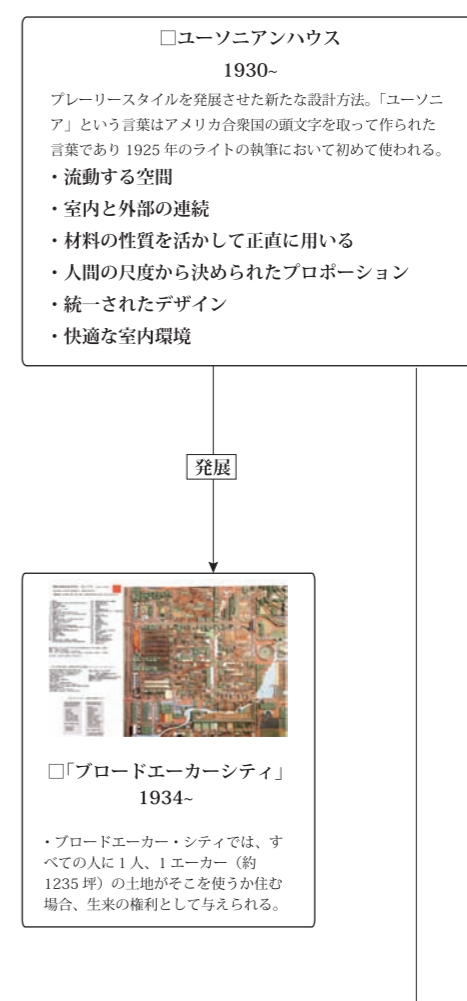
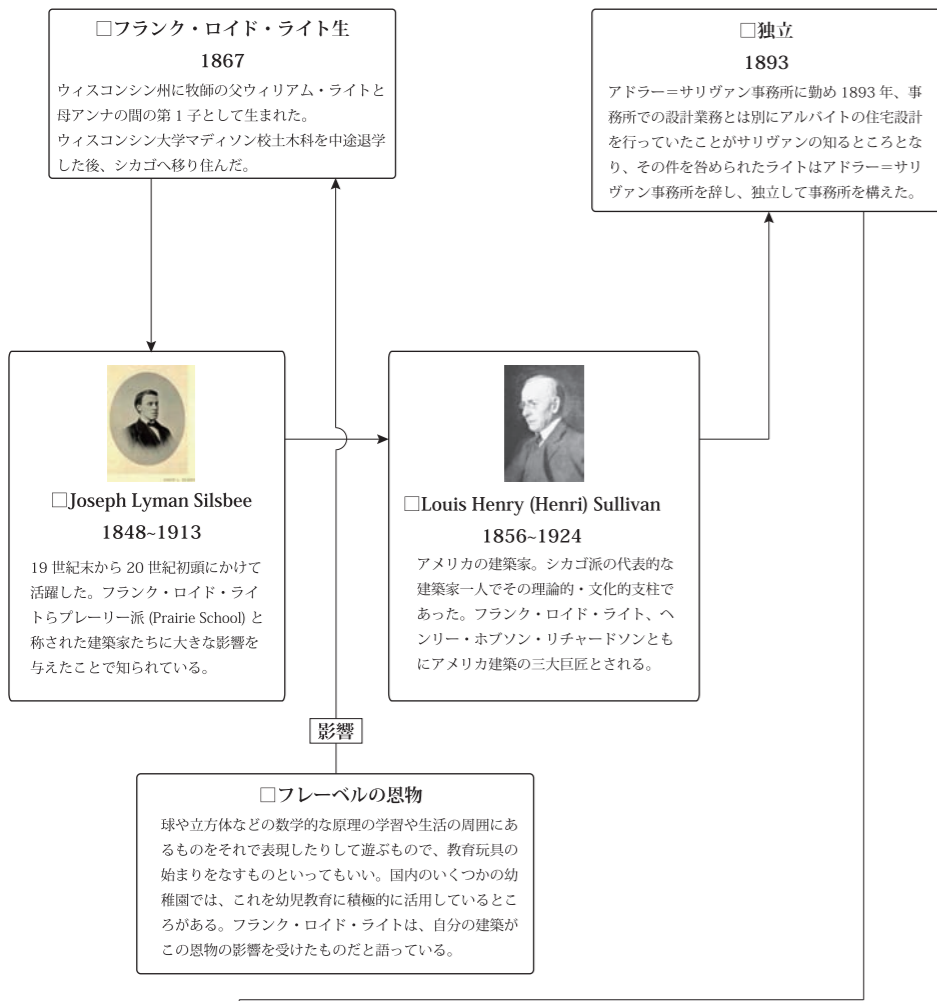


フランク・ロイド・ライト初期

第一黄金期

不幸・逆行

第二黄金期



□ウィンズロー邸 1893  
フランク・ロイド・ライトが建築事務所を開いて最初の仕事として建てた住宅。バランスのとれた中央集約的な正面ファサードは古典主義の影響を示唆しているが、ローマレンガ、キャストコンクリート、テラコッタといったシンプルで自然な材料を採用し、当時の住宅とは対照的な方法でこれらの材料を構成した。レンガはキャストコンクリートの雨押さえから立ち上がっている。2階はゴールドのレンガとは対照的に、濃い茶色のテラコッタで抑えられた表現になっている。屋根は庇を越えて突き出し、ゆるやかな勾配で宙に浮いたような表現となっており、ヴィクトリア後期の急勾配の小塔とは対象をなしている。当時稀な垂直なデザインと材料に忠実な処理が、この住宅を紛れも無く近代化している。

□ユニティ・テンプル 1905  
主の構造体を鉄筋コンクリートによって作られた型枠を使った最初の建物である。ユニティ・テンプル設計に当たってライトは日本の建築物を大いに参考にしたといわれ、現在ではこのユニティ・テンプルと日光東照宮の拝殿と本殿の平面図との相似が指摘されており、それについてのドキュメンタリー映画なども先日シカゴでは公開されていた。しかしながら本人自身は、最後まで日本建築からの影響については固く首を縦に振らず、あくまで独自のデザイン理念によるものだという意思表示を示し続けたという。

□ロビー邸 1908-9  
緩やかな勾配屋根、極端に突き出した軒先、横目地の強調された煉瓦の外壁、縦長の連続窓さえが水平線を強調する。ロビー邸は、実に第一黄金時代のライトが目標とした草原住宅の理想が、集約的に顕現した作品。中西部の草原地帯にあって、高さという高さは、すべて否定されなければならない、としたライトのモットーが、最もよく理解出来る住宅である。大地を這うように、一直線に伸びたこの住宅は草原と呼ぶに相応しい。

しかしながら本人自身は、最後まで日本建築からの影響については固く首を縦に振らず、あくまで独自のデザイン理念によるものだという意思表示を示し続けたという。

□帝国ホテル 1923  
当時の総支配人だった林愛作は旧知のアメリカ建築家、フランク・ロイド・ライトに新館の設計を依頼した。ライトは来日して、使用する石材から調度品に使う木材の選定に至るまで、徹底した管理体制でこれに臨んだ。驚が翼を広げたような巨大なホテルは、実は小部分がいくつも繋ぎ合わされた連結構造になっており、これで建物全体に柔軟性を持たせるとともに、一部に倒壊があっても全体には累を及ぼさない仕組みになっていた。また大規模ホテルとしては世界で初めて全館にスチーム暖房を採用するなど、耐震防火に配慮した画期的な設計だった。

□カウフマン邸 (落水柱) 1935  
渓流の上にダイナミックに跳ね出したリヴィングの屋根とそれと直行する大きなキャンチレバーのバルコニー。石を積んだ厚い壁は川床の岩がそのまま這い上がりリヴィングの暖炉と、厨房・寝室の外壁を構成し、スリット状に垂直に立ち上がる窓がさらにその垂直性を強調する。それに絡む薄い庇。全体が水平性と垂直性の絶妙なバランスを保っている。自然と一体になった建築。まさにこの溪流と滝があってこそその建物である。玄関車寄せの上に掛かるバーゴラと雁行する壁面。傾斜地の高低差をうまく利用した丘の頂きにあるゲストルームとの連続性。広大なリビングに入ると三方のガラス面からこの豊かな自然が飛び込んで来る。これに続く溪流を見下ろす事の出来る広いバルコニー、何とリビングから川面に下りる階段まで用意されている。

□ソロモン・R. グッゲンハイム美術館 1943-1959  
グッゲンハイム美術館はライトの最も有名な建築である。グッゲンハイム美術館は「流動的」な構造を持つ。コンクリートが流線型にかたどられ、スチールで補強されている。美術館の壁はアーティストが絵画を描く時のイーゼルのように傾斜された。連続した帯状のスカイライトでは白熱灯が自然光を補い、この曲線を描く傾斜した壁に沿って絵画を照らしている。